楠木正成(くすのきまさしげ)銅像

印象的で重厚感ある銅像は、武士の行動規範である武士道を貫いたことで知られる楠木正成（1294 年-1336 年）を描写しています。楠木は、天皇への忠誠を示すために、最終的に自身の人生を犠牲にしました。彼の戦術の才気は、後醍醐天皇の倒幕運動を助け、朝廷の一時的な復権へ寄与しました。しかし、後醍醐天皇は反逆的な武将に裏切られ、楠木に大軍との戦を命じます。勝つことは叶わないと予測した楠木は、考え直すように天皇を説得しました。結局、戦は戦術的失敗に終わります。彼は捕まるのであればと、武士の伝統にならった切腹で名誉ある死を遂げました。

この像は 1900 年に宮内庁に献納されました。日本の近代化を決定的なものとした明治維新を率いた武士、西郷隆盛の上野にある有名な銅像を制作した高村光雲と後藤貞行によって制作されました。他にあまりない純銅無垢製のため、非常に重量があります。この性質によって、1923 年の関東大震災では被害を免れたとのことです。

後醍醐天皇の日本海の隠岐島からの帰還を待つ、楠木の様子を表現した銅像です。後醍醐天皇は、武家政権であった鎌倉幕府の倒幕を初めて試みた 1331 年に失敗し、島流しにされた後、1333 年に島を脱出して権力奪還を画策しました。